

『微睡みの中で』

夢の中で、夢だと気付かずに腕を伸ばした。

目覚めた時、現実と気付かずに腕を伸ばした。

幻に手を添えて、その指先が触れる直前に、唐突に全てを思い出した。

いや、全ての真実に勝る、たった一つの事実を思い出した。

『彼女に触れてはならない』

そして唐突に腕を止める。

何を考えているのか、何を望んでいるのか、何を想っているのか。

自分には確かめられない、透明な瞳と目が合う。

だから、誤魔化す為に微笑みを浮かべる。

寝ぼけた頭で、ぼやけた視界で、汚れた仮面に素顔を隠す。

するといつしか自分でも分からなくなる。

一体、何を願ったのか。

ただの一つも分からぬままに、今夜も同じ夢に抱かれる。